

第百四十一話 米戦略家が摘出した日米戦決定過程の教訓

米戦略家が、日米戦に至る過程を検証して幾つかの教訓を摘出している。その教訓には成程と思わせる説得力があり、我々の自省の糧として或いは、現代安全保障を考えるうえでの示唆を与えてくれる。それを紹介して、小生なりのコメントを述べたい。

1 7つの教訓

- ①恐怖心とか誇りといった感情は意思決定上の重要なファクターになる。そうした感情に合理性があるか否かは関係がない。
- ②潜在敵国の文化や歴史についての知識は極めて重要である。
- ③相手国への牽制が有効であるか否かは牽制される側の心理に依存する。
- ④戦術よりも戦略が重要である。
- ⑤経済制裁は、実際の戦争行為に匹敵しうる。
- ⑥道徳的或いは精神的に相手より優れているとの思い込みは敵の物理的優位性を過小評価させる。
- ⑦戦争が不可避であると考え、自らその予言を実行してしまいがちになる。



2 ①について

10倍する大国と如何に対峙するかについて、第百二十一話でも述べた永野軍令部総長の「戦うも亡国、戦わざるも亡国、戦わずして国滅びた場合は真の亡国、・・・」（以下割愛）に端的に示されている。太った豚よりも脊せたソクラテスを選ぶのが国家としてのプライドだ。

3 ②について

日本は米国民の戦争介入反対感情を真に理解していたか、また、米国民は長期持久の厳しい作戦に耐えられないとの思い込みが戦争指導構想に滲んでいる。大和魂があると同様にヤンキー魂もあったのだ。リメンバーパールハーバーを予期し得なかった？

4 ③について

ルーズベルトの誤算は、日本の南進を牽制すべくハワイ真珠湾に艦隊を集結させ、フィリピンに戦略爆撃機を展開し、経済制裁を加えれば日本の行動を抑止できると考えたことだ。米国の脅威には実効性があると日本に思わせ得ると考えた。ルーズベルトは明確な意思を日本には伝えていない。

5 ④について

本話で幾度も指摘したように日本の戦争指導には、大戦略が欠如している。北に備え、支那で戦い、そのような状況下で米英蘭に挑むのは、どう見ても愚策である。

6 ⑤について

国家の生存を脅かすほどの経済制裁は、窮鼠猫を噛むになる。日本は石油の対米依存度が8割であり、石油の禁輸は死の宣告に等しい。

7 ⑥について

日本人が優秀であると同様に米国民も優秀なのであって、米国民を余りにも軽んじていたかもしれない。物的国力の絶対的劣位を精神力でカバーする以外に方策はなく、出来ると思いたかった。それが過小評価へと繋がった。

8 ⑦について

日米戦必至の機運は日米双方にあったように思える。小生は運命論者ではないが、結果的には運命に引き摺られるようにして日米は戦わざるを得なかった。

* 戦争には錯誤があり思い込みがあり誤解がある。それを思い知らされる。

(第百四十一話 了)